

おほ はらひの ことば  
大 祓の 詞

高天原に神留り坐す 皇親神漏岐 神漏美の命以ちて 八百万神等を  
 神集へに集へ賜ひ 神議りに議り賜ひて 我が皇御孫命は豊葦原水總  
 國を 安國と平けく知ろし食せと 事依さし奉りき 此く依さし奉り  
 し國中に 荒振る神等をば 神問はしに問はし賜ひ神掃ひに掃ひ賜ひ  
 て 語問ひし磐根樹根立草の片葉をも語止めて 天の磐座放ち 天の  
 八重雲を伊頭の千別きに千別きて 天降し依さし奉りき 此く依さし  
 奉りし四方の國中と 大倭日高見國を安國と定め奉りて 下つ磐根に  
 宮柱太敷き立て 高天原に千木高知りて 皇御孫命の瑞の御殿仕へ  
 奉りて 天の御蔭日の御蔭と隠り坐して 安國と平けく知ろし食さむ  
 國中に成り出でむ天の益人等が 過ち犯しけむ種種の罪事は 天つ罪  
 と畔放ち 溝埋め 樋放ち 頻蒔き 串刺し 生刺ぎ 逆刺ぎ 屎  
 戸 許許太久の罪を 天つ罪と宣り別けて 國つ罪とは 生膚断ち  
 死膚断ち 白人胡久美 己が母犯せる罪 己が予犯せる罪 母と子と  
 犯せる罪 子と母と犯せる罪 畜犯せる罪 昆虫の災 高つ神の災  
 高つ鳥の災 畜仆し 蟲物せる罪 許許太久の罪出でむ 此く出でば  
 天つ宮事以ちて 天つ金木を本打ち切り 末打ち断ちて 千座の置座  
 に置き足らはして 天つ管麻を本刈り断ち 末刈り切りて 八針に取  
 り辟きて 天つ祝詞の太祝詞事を宣れ  
 此く宣らば 天つ神は天の磐門を押し披きて 天の八重雲を伊頭の千  
 別きに千別きて 聞こし食さむ 國つ神は高山の末 短山の末に上り  
 坐して 高山の伊褒理 短山の伊褒理を搔き別けて聞こし食さむ 此  
 く聞こし食してば 罪と言ふ罪は在らじと 科戸の風の天の八重雲を  
 吹き放つ事の如く 朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き拂ふ事の如く  
 大津邊に居る大船を 舳解き放ち 艦解き放ちて 大海原に押し放つ事  
 の如く 彼方の繫木が本を 焼鎌の敏鎌以ちて打ち掃ふ事の如く 遣  
 る罪は在らじと 祓へ給ひ清め給ふ事を 高山の末短山の末より 佐  
 久那太理に落ち多岐つ 速川の瀬に坐す瀬織津比賣と言ふ神 大海原  
 に持ち出でなむ 此く持ち出で 往なば 荒潮の潮の八百道の八潮道の潮  
 の八百會に坐す速開都比賣と言ふ神 持ち加加呑みてむ 此く加加呑  
 みてば 氣吹戸に坐す氣吹戸主と言ふ神 根國底國に氣吹き放ちてむ  
 此く氣吹き放ちてば 根國底國に坐す速佐須良比賣と言ふ神 持ち佐  
 須良ひ失ひてむ 此く佐須良ひ失ひてば 罪と言ふ罪は在らじと 祓  
 へ給ひ清め給ふ事を 天つ神 國つ神 八百万神等共に 聞こし食せ  
 と白す